6　成果と課題

本年度は、予期せぬ予算削減があり、計画の変更を余儀なくされたが、大学本部からの支援に加えて、経費節減や運営方法の工夫などによって教育面、研究面でも予想以上の成果をあげることができた。本拠点形成の特徴である海外パートナー拠点についても、連携する拠点数は増加するとともに、さらに交渉を継続中である。また、拠点体制も確立し、教育・研究等の運営も円滑に行っている。教育面では、各プログラムが有機的に連動して、ステップアップ方式の国際的な人材育成体制が確立した。研究面では、次世代研究プロジェクトへの研究支援や、国際共同研究への若手研究者の積極的な参加を通じて、多くの成果が生まれ、ワーキングペーパーの発刊や国際共同研究成果報告書をはじめ、英語報告・論文の増加、研究職への就職、学会賞の受賞、外部資金の獲得などの成果として現れている。本拠点が主催する国際学会が決定する等、国際的にも評価されており、2 年目としては十分な成果をあげることができた。

拠点形成の成果

本拠点の大きな特徴は、海外パートナー拠点との連携ネットワーク構築による人材移動と交流にある。現在、海外パートナー拠点は、13 地域 15 機関であるが、今後さらに拡大する予定である。海外パートナー拠点との連携による成果は、以下のとおりである。

①グローバルネットワークを活用した共同研究、とりわけ若手研究者のイニシアティブによる共同研究の発展。

②アジア版エラスムス・パイロット計画による若手研究者および教員の交換の活性化。連携大学院構想、将来のアジア版エラスムスの実現等につながる。

③アジア地域内のアカデミックな交流のための基盤形成。リーディングス「アジアの家族と親密圏」の編集・出版、アジア横断数量調査の実施によるアジア家族比較研究のためのデータベース作成等により、アジア諸社会の相互理解と学術交流のための知的共有基盤が形成される。

以上のようなグローバル化に対応すべく、世界的拠点にふさわしい学内体制の充実も図っている。

① COE 教員・研究員として、外国での大学院教育経験者や博士号取得者を採用し、研究の活性化を図った。

②事務スタッフ全員が英語に不自由がなく韓国語にも対応できるため、世界的拠点にふさわしい事務局を構築できたと言える。

③京都大学が獲得したグローバル 30 プログラム「K.U.PROFILE」の中で、本 COE 拠点を中心に研究科横断的な英語プログラム「京都で学ぶ日本学・アジア学」を構築した。

④本 COE 拠点を基盤として、大航海プログラム「京都エラスムス計画」を獲得し、若手研究者の海外派遣を促進する体制を整備した。

教育成果

国際的な人材育成については、広範なプログラムを通じ、段階を踏んで（ステップアップ方式による）国際舞台における学術発表および国際共同研究が可能になるよう、海外パートナー拠点との協力を軸に国際指導体制を確立した。

①海外の多彩な研究に接する機会の提供 : 海外オムニバス講義、英語によるセミナー、国際会議の開催。

②外国語能力向上の機会の提供：外国語学習補助制度（英語、韓国語、中国語）、英語のプレゼンテーションに関する演習

③論文作成能力向上の支援：発表論文のフルペーパー校閲と指導

④英語等による発表や研究交流の機会の提供 : 次世代グローバルワークショップ、海外パートナー拠点との学術交流会

⑤国際学会における発表の支援：学会発表渡航支援

⑥研究成果の公開推進：次世代グローバルワークショップ・プロシーディングスの発行、本拠点の英文学術誌 *Journal of Intimate and Public Spheres*、および学会誌への投稿指導

⑦海外における長期的な調査・研究の支援：エラスムス派遣

⑧海外パートナー教員による指導の強化:海外パートナー拠点からの招へい教員による指導体制の構築

⑨オープンコースウェア（OCW）およびビデオライブラリーの作成

以上のプログラムはそれぞれが関連し合っており、有機的に連動している。年 1 回開催される国際会議と次世代グローバルワークショップにおいて海外パートナー拠点が一堂に会し交流することにより、信頼関係が構築され、若手研究者が海外で調査研究を行う際の円滑な受け入れ体制が実現可能となった。

研究成果

本拠点は、6 研究科 2 研究所により構成されており、多くの人材が所属している。研究プロジェクトも 40 を超えており、個々の知見が出されているが、ここでは全体的な知見をあげる。

①家族を中心とした親密圏のあり方は、福祉国家、労働市場、国際移動、メディアによる規範形成などの組み合わせによって規定されるが、グローバル化と高齢化の時代（第 2 の近代）における新秩序形成のプロセスにおいて、東アジア・東南アジアの多様な社会に共通のトレンドが生まれていることが明らかになった。

②その 1 つの原因は、福祉国家形成が遅れたこれらの社会に共通する家族主義的福祉レジームにある。外国人介護労働者の導入などケアの市場化も、アジアでは家族主義と

結合して生じている。

③もう 1 つの原因として、テレビや雑誌、漫画などのメディアが果たしている役割も大きい。たとえば、日本の漫画を媒介として地域共通の新たなジェンダー・セクシュアリティ文化が生まれつつあることを確認した。

④アジア近代を、近代のさまざまな局面が重なって生起する「圧縮された近代」（ソウル大学チャン・キョンスプの概念）と捉えることで説明できることも多い。女性の主婦化と脱主婦化の同時並行等が好例である。

⑤他方、「コミュニティ」概念の重要性の高まりなど、アジアとヨーロッパに共通したトレンドも見出された。新自由主義のもとで福祉国家の危機が唱えられたためでもある。

⑥リーディングス編集の過程で、アジア地域の伝統の多様性が明らかになった。階層差、中国的伝統とインド的伝統の影響を受けた地域差等が重要な着目点である。同時に、近代化という社会変化、とりわけそれを非西洋圏にあって経験することにより、アジアは共通の変化のトレンドを経験してきた。現在起きているのは、その何度目かの波であると考えることができる。

<u>成果公開</u>

研究成果は、さまざまな形で公開を始めている。

① 学際的な英文学術誌 *Journal of Intimate and Public Spheres* の創刊

②国内外の出版社より研究成果をまとめた単行書を刊行

③ワーキングペーパー23 点、国際研究成果報告書 5 点：平成 20 年度研究プロジェクトの成果

④次世代グローバルワークショッププロシーディングスの発行

⑤英文リーディングス『アジアの家族と親密圏』の編纂：2011 年度より海外出版社から刊行予定（全 6 巻）

⑥COE 研究成果シリーズ「変容する親密圏/公共圏」（英・日）の刊行準備：5 巻分の執筆をほぼ終了した

⑦ビデオライブラリー「国境を越える女たち」の制作：国際移動コアプロジェクトの成果

⑧国際シンポジウム “Family and Intimacy in Asia” 他、計 35 件の国際会議を開催

⑨政策提言・社会貢献：日本学術会議、NGO との共催シンポジウムの開催、「男女共同参画に資する調査研究」の成果にもとづき女性医師問題に関するシンポジウム開催

人材育成の成果

本拠点の人材育成の成果は、就職、学会賞、外部資金の獲得、学会報告の増加など外部の客観的な評価として現れている。

①好調な就職：研究員 3 名、助教 1 名の他、大学院生も好調に研究職への就職を決めている。本拠点でのグローバルな研究経験が評価された者、次世代研究プロジェクトの資金を得て新分野の調査研究を実施したことが評価された者など、本拠点での人材育成の成果と言い得る例が多い。

②学会賞：COE 教員・研究員、および大学院生が第 3 回日本教育社会学会奨励賞（今田絵里香）、第 23 回環太平洋学術研究奨励賞（金戸幸子）、第 83 回日本経営学会賞（亀岡京子）、関西社会学会第 60 回大会優秀報告賞（菅原祥）を受賞した。

③外部資金：次世代研究プロジェクトの経験等が、外部資金獲得の増加につながった。GCOE のプログラムを除く他資金の採択件数は、2007 年度 12 件、2008 年度 13 件、2009 年度 23 件であった。

④学会報告：博士課程の学生の学会報告は増加傾向にあり、特に国際学会での報告が増加している。

国際的評価

本拠点の国際的評価は、国際学会の開催、海外研究者の来訪の増加等に顕著に現れている。また、海外パートナー拠点の研究者からも高い評価を得ている。

①国際社会学会家族社会学部会（ISA RC06）シンポジウム：2011 年 9 月に「親密圏と公共圏の再編成」という COE のテーマで京都大学において開催することになった。本拠点の取り組みが国際学会でも評価されたことの表われであり、アジアと欧米の研究者とをつなぐ拠点への役割も期待されている。

②他資金による海外研究者の集中：COE のエラスムス招へいとは別に、他の資金により本拠点で研究を希望する海外の若手研究者や教員が増えており、国際的教育研究拠点として本拠点の評価が上がっていることが伺える。現在はイギリス、ベトナムからの若手研究者が研究員および「論博」プログラムの大学院生として滞在中であり、平成 22 年度中にタイと韓国の教員がそれぞれ他資金で本拠点に数カ月滞在する予定である。

③海外パートナー拠点の教員からの評価：本拠点に滞在・訪問した海外研究者や海外アドバイザーから、「研究分野、文化そして世代を超えて知識の社会化を確立し、その成果として教育・研究能力が向上している」（Patcharawalai Wongboonsin 教授、チュラロンコーン大学）、「学術交流や研究成果の形成に貢献し、研究や教育の国際化のための他のプログラムに比べても、COE は最良のモデル」（Tseng Yen Fen 教授、国立台湾大学）、「（拠点形成による）ネットワークこそ、より求心力のある地域の形成の促進に資する

と思われる」（Rajni Palriwala 教授、デリー大学）といった、本拠点計画の基本方針や成果について高い評価を受けた。

学会評価

本拠点の若手研究プロジェクト・国際共同研究には学外メンバーも含んでおり、また国際シンポジウム・次世代グローバルワークショップ等にも国内各地から参加を得ている。国内学会へのこうした貢献は全国的に広く認知され、国内学会における国際セッション開催を任される等、高い評価を得ている。

①日本家族社会学会大会国際セッションの開催：2011 年 9 月の大会に、ISA RC06 シンポジウムで来日する世界的研究者によるセッションを設け、国内外の研究者の交流機会を提供する。ISA RC06 シンポジウムの日本開催は 1960 年代以来であり、学会国際化の節目になると期待されている。

②日本人口学会大会の京都大学開催（2011 年度）: COE として新機軸のセッション開催を期待されている。

③アドバイザー意見：2009 年度の国際会議と次世代グローバルワークショップに参加されたアドバイザーの牧野カツコ教授（日本家族社会学会会長）より、水準の高さと本拠点の取り組みについて評価を受けた。

社会貢献

本拠点では、研究成果を実践的な活動や政策提言に連結することを目指しており、本年度の活動においても行政や NGO との連携する活動を実施した。

①日本学術会議シンポジウム共催：「少子高齢化」および「ジェンダー政策」についての多くの学問分野からの専門的見解を集約し、多くの聴衆を集めて社会への提言を行った。

②国際機関との協力：国連社会開発研究所（UNRISD）、OECD、欧州評議会とケアや移民政策について調査、研究し、シンポジウムの開催の協力を行った。

③行政機関との協力：ドイツ・デュースブルグ市、美濃加茂市の移民の社会統合政策に関するプロジェクト、内閣府、京都市、京都府等の国・地方自治体における男女共同参画や移民政策等の調査・推進事業。

④国内外の NGO との協力：NGO との共催によりシンポジウムを開催し、アカデミズムと市民社会の架橋を促進した。

⑤京都大学女性研究者支援センターとの連携：男女共同参画に資する調査研究の実施、およびシンポジウム「女性医師が働き続けるために　大学病院の職場環境を考える」「女性医師支援からすべての医師のワークライフバランスへ」を開催（2009 年）し、

京都新聞（2009 年 4 月 25 日）に掲載。

今後の課題

本プログラムは来年度より後半期に入る。期間内での目的達成と終了後の成果の継承に向けて、今後の課題として以下のような点が挙げられる。

人材育成の課題

本プログラムの人材育成に関する課題としては、以下の 3 点があげられる。この 3 点は、本プログラムの人材育成の最優先課題であるアジア版エラスムス・パイロット計画に関わるものである。

第 1 の課題は、交流する大学院生・研究者の数の問題である。希望者は招へい・派遣とも、実際に採用可能な人数を大きく超過しており（特に招へいでは、若手研究者は 3 倍、教員で 2 倍以上）、苦渋の選考を続けている。パイロット事業としてであっても、少なくとも現在の 2 倍の実績を積んで、問題点や改善点を明らかにする必要があるだろうが、予算の関係で実現が困難になっている。今後は、他の資金獲得の努力をしつつ、拡充していく必要がある。幸い平成 22 年度からは大航海プログラム「京都エラスムス計画」が本格化するので、若手研究者派遣は大幅拡大を予定している。招聘については、グローバル l30 には招聘費用が含まれないが、そのかわり、自己資金をとって本拠点での研究を希望する海外研究者が増加している。

第 2 の課題は、カリキュラム内容の調整である。アジア版エラスムス・パイロット計画により招へいした留学生にどのような体系で授業を提供し指導していくのかについて、海外パートナー拠点との共同でのカリキュラム開発を進める必要がある。本拠点では 2010 年度よりグローバル 30 と連動して、研究科横断的な英語講義の体系化を図り、日本語習得中の留学生も受講しやすい研究科横断的な英語コース「京都で学ぶ日本学・アジア学」を提供していく予定である。

第 3 の課題は、第 2 と関連する単位互換制度の整備である。これまでは博士課程修了者の派遣・招へいが多かったため、ケースバイケースで処理してきたが、今後は、まずは本拠点と特定の海外パートナー拠点との間の 2 者間で、次に全体のエラスムス・パイロット計画の中で、方針を定めていく必要がある。

研究活動の課題

本年度からの本格的な研究推進を予定していたが、予算削減により、研究費を若手研究プロジェクトに重点配分したため、研究面の本格的展開が焦眉の課題である。

第 1 の課題は、中核的国際共同研究(コアプロジェクト）の本格的展開である。最初の 2 年間では若手研究プロジェクト・拠点内公募型国際研究プロジェクトなど、個々の研究者のイニシアティブによる研究を優先して、本拠点のテーマに関する研究意欲を高めること

に主眼を置いてきた。また研究方法により組織した研究班によって研究方法の習得に努めてきた。今後は、拠点全体として成果を挙げることを重視して、拠点として体系的に計画する課題別プロジェクト（コアプロジェクト）を研究活動の中核に据え、若手および海外パートナー拠点の研究者の参画を得て、強力に推進していく。

第 2 の課題は、理論的な精緻化と体系化である。これまでは個々の研究者のイニシアティブによる研究を優先してきたので、個別研究では多くの興味深い成果が上がったが、相互の関連や全体としての位置づけが十分できたとは言い難い。今後は、コアプロジェクトを土台に、個別研究の知見を総合し、体系的理論化をめざしていく。特に「公共圏」のさまざまなあり方を分節化し、それぞれの変容を把握できる理論の獲得を課題と考えている。

将来構想に向けて

本拠点の目的である（1）現代世界の変容を包括的にとらえることのできる研究分野の開拓、（2）開拓者となる人材育成、（3）それを支えるグローバルネットワーク（とりわけアジアネットワーク）の形成は、残りの 3 年間で達成される予定であるが、グローバル COE プログラム終了後もそれらを維持し、さらに発展させていくことができるよう、プログラム実施中から永続的な体制づくりを進める。

第 1 に、国際的には、アジア版エラスムス計画の実現、次世代グローバルワークショップの継続的実施、この分野の研究者の国際的フォーラムとなる学術誌 *Journal of Intimate and Public Spheres* の継続的発行を支える国際学会ないしはそれに準じる国際的組織づくりが必要である。海外パートナー拠点とのネットワークをさらに拡充し、フォーマル化して、恒常的組織の構築をめざす。その方向をめざして、平成 23 年度にはアジアの他の海外パートナー拠点に次世代グローバルワークショップのローカルオーガナイザーを引き受けてもらい、京都大学を中心にせずに対等で安定した関係を築くように努める予定である。

第 2 に、国内的には、アジア版エラスムス計画の実施についての国内的コンセンサスが得られるように、日本学術会議、各分野の学会などを通じて合意形成を図る。

第 3 に、京都大学内において、上記のグローバルネットワークの結節点となるような「アジア親密圏／公共圏センター」を開設すべく、各方面と折衝を図る。グローバル 30 により平成 22 年度より提供を開始する研究科横断的な「京都で学ぶ日本学・アジア学」プログラムの提供基盤としての役割も果たせるのではないか検討する。また「京都エラスムス計画」が開設を構想している「アジア国際共同研究支援センター」との統合や連携も模索する。